

我が寮の理論と実践

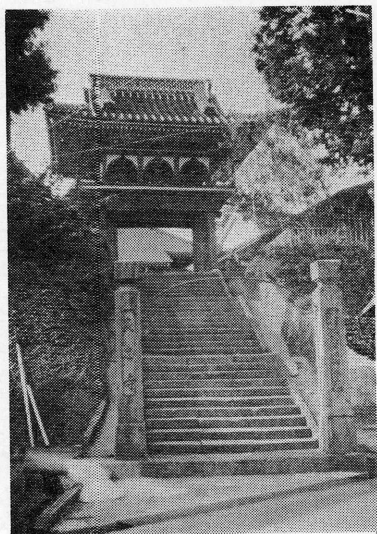
(Ⅱ養護施設聖煌寮の紹介Ⅱ)

三 上 行 紀

(聖煌寮副寮長)

(一) 浄土宗第三祖良忠上人誕生地と聖煌寮

養護施設聖煌寮は島根県那賀郡三隅町向野田三四二番地に、



昭和二十八年十一月一日に開寮しました。この地は、今から七八二年前の正治元年(一一九九年)七月二十七日、浄土宗第三祖記主良忠上人が誕生せられた地でもあり、その地にあやかり聖煌寮と名づけられた。上人が一二一年の二月出雲の鰐淵寺、月珠房信暹に師事され入門されるまでの十三ヶ年育たれた土地である。

ここに現在良忠寺があり、その横に聖煌寮が、設置されている。

良忠寺には、良忠上人の座像が安置され(浄土宗宗宝指定)、毎月二日には、児童、職員共参拝している。

(二) 聖煌寮設立の理由

聖噤寮は児童福祉法第四十一条により制定された、環境上養護を必要とする児童を収容し、家庭に代わる施設養護の社会的使命を果たして行くことを目的とする施設である。

児童福祉法の精神により、全国の児童収容施設は運営されているが、全く同一ではない。特に民間施設に於いては千差万別である。その違いは、その施設の環境と特殊な運営の基準に依るものである。いわゆる施設の個性である、人間も顔形が違う如く、性格も十人みな違う。違うから尊いのである。民間施設も、その施設その施設の個性があり、特殊性があるってこそ尊いのである。

聖噤寮をこの三隅の地に選んだのは、法然佛教の完成者である記主良忠上人の生誕地だからである。この偉大な宗教文化人の生まれた環境の中で特殊性を発揮し、健全な社会人を育成することと、石見の子供は石見の施設で育てたい、これが設立の理由である。(初代寮長 故三上善海)

(三) 寮歌 (設立の理由と運営の基本)

一、浄き教えを伝えては

三代四祖と仰がるる

(一) 法然上人の教え

(二) 法然(一代) 聖光(二代)

二人の聖人生み出せる

三隅河畔の我が寮舎

二、国の歩み 世のすがた

めざめしめたり我が二聖

先哲我を導くと

受けて果だたん聖噤寮

三、意気はあがりて海山に

文化新たに生み出さん

明るく 正しく 仲もよく

喜び働く 聖噤寮

(四) 施設の概要

名称 聖 噤 寮

種 別 養護施設

経営主体 社会福祉法人 三隅愛育会

設立年月日 昭和二十八年十一月一日

定 員 四十五名

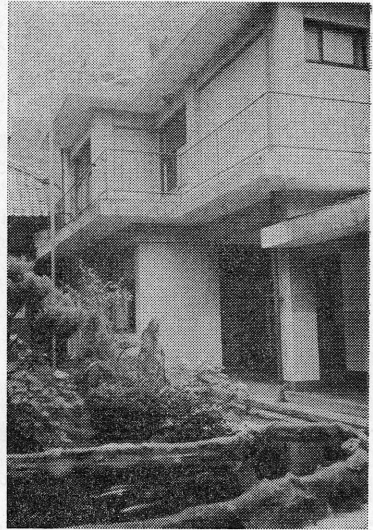
所在地 島根県那智郡三隅町向野田三四二番地

良忠(三代) 良暁(四代)

(一) 良忠上人、良暁上人

(二) 良忠上人、良暁上人

(三) ふるい立つ心
やろつとする意欲



- 。敷地 六六〇㎡
- 。運動場公園 八、三二二㎡
- 。建物 木造 二階二五二・三四㎡
- 鉄筋 二階四〇一・三一㎡
- 。施設長 三上 運海
- 。職員 十五名

(五) 養護目標

健全な社会人

清き愛情と家庭的な雰囲気による、共同生活の下に、明るく、正しく、仲よく、喜び働く、四つの養護目標をもとに健

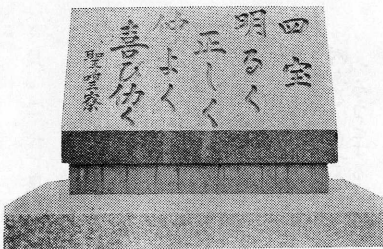
全な社会人を育てることを目標とする。

。私達は、今日一日、不完全より完全へと『**明るく**』成長いたします、完全のきわみ（極）が、み佛様と信じます。

。私達は、今日一日、大宇宙の心を心として、『**正しく**』生きぬきます、み佛様は大宇宙を、身とし心としていられます。

。私達は、『はい』『ありがとう』『すみません』『おはよう』『おやすみ』と、『**仲よく**』すなおにいえる人となります。

。私達は、今日一日与えられ
たお仕事を、『**喜び**
働いて』自分の人柄
をみがきます。



（六）養護理念

◎ 明るく

明るくは、人生観の確立である。人生観とは、人生の見方、考え方である。人間は何のために生まれてきたか（人生の目的）、何のために生きているか（人生の意義）、明確な解答を追求する姿勢である。

目的ある人生、意義ある人生たらしめる事が、人間の理想である。理想は人格を高め、人格は人間の理想を高めて行く、これらこそ、明るい一日であり、一年である。

次に成長とは、動物の状態より人間の状態へと変わりつつある判断を云う。二十代三十代、四十代と続いた十億にも近い自分の祖先のつながりがあつての今日の自分である、老若男女、十人十色、性格はみな異なるが、最終目標は、人間として生まれて一日一日成長し、人格の完成という目標への成長過程が努力という意味である。

。目標Ⅱ 一日一日と自己を成長させ、自主性、社会性、創造性のある調和のとれた人格を育てよう。

◎ 正しく

正しくとは真正で正しく生きることである。正しくは道德で、生きるとは宗教である。又感謝と祈りであり、心の有り方である。

正しく生きるとは、天地自然のお蔭に生きることであり、自分を発見することである。天地自然を離れた自分は存在しない。自然界の生命を共にし、結びつきによって、我々は生きている自覚が必要である。（共生）

人生を正しく生きる為には、自然の法則を根本としなくてはならない。自然の法則とは根本道理である。

。目標Ⅲ 生命の尊さに感謝し、人生を正しく生きぬく力を養おう。

◎ 仲よく

自分とは、親子先祖の「タテ」の関係と、社会対人関係の「ヨコ」の生活環境との結び目である。この「タテ」と「ヨコ」との関係のないところに自分は存在しない。この真実を忘却する所に、不和というものが発生する。この「タテ」と「ヨコ」との関係を、三世十方の諸仏のお蔭に生かされていると、仏教の教えでは説く。この三世十方の諸仏のお蔭に生かされている自己を発見した所に、感謝の念が生じ、合掌す

る心がおこる、この合掌する所が共生の社会で、共生とは、すべてのものと生命を共にしている自覚に立った生活である、生活とは、自分も生き、他をも生かす生活態度を云う。

。目標Ⅱ共に仲よく励ましあい、許しあっていさかいなく、なごやかな信頼に満ちた家庭的な雰囲気と人間関係を育てる。

◎ 喜び働く

活き生かされる自然の仕組が、職務という形式でなされる。それは自ら生き他を生かすものである。

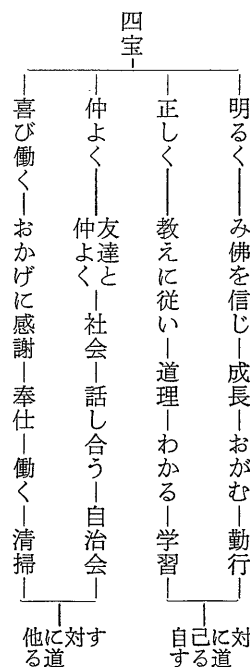
生きることは働くことである。故に我が身とは、生き働きある所に存在する。この我が身が働かれ、生きられるという自然の仕組の幸せを悦び、心より感謝しなければならぬ。

この様に考えてくると、損得をはなれ、自分の職務に精いっぱい打ち込んで、それぞれの仕事に張り切ろう。喜び働く。

人間には、所有本能と創造本能がある。この創造本能が労働の基本である。人間が生きていく為には、色々なものを相手にしつつ、正しい生き方をして行かねばならない。正しい生き方とは、所有本能を満足し、財産を増やす人生ではなく、

創造本能を満たし、物を作り出し、生産と喜び働く内に獲得するものである。

。目標Ⅱ勤労の尊さを知るとともに、進んで皆と力を合わせ、人の為、又集団生活向上の為につとめよう。



(七) 児童文集より

四宝の碑の除幕式に

菊の香りの清くただよい、秋おしむ今日の日、亡き寮長先生をしのび、ここに四宝の碑の除幕式に、私達寮児一同参列しますことは大きな幸せとありがたく思います。

思いおこせば、私達は亡き寮長先生の、み佛様の様な、大きなお慈悲の中に、常にほうようされ、かぎりない愛情を受けながらすくすくと育って来ました。そのみめぐみの中にど

っしり根をおろし、私達の大きな支柱となっていたのが、この四宝でありました。この度栗山先生の御志又、寮を巢立ち社会人となられました、お兄さん、お姉さんの力ぞえにより、この様な立派な四宝の碑を、ここにおさめられました事は、何よりの喜びであり感謝の気持でいっぱい御座居ます。

亡き寮長先生も私達と同じに、どんなにおよろこびかと思えます時、数えきれないつかしい思い出と、先生のあのやさしい笑顔がまぶたをちらつきます。

私達はこの大きな四つの宝を持っている事を何よりほりとして生きて行きたいと思っております。

ここに共に生活した思い出と共に一生涯を通じてこの四宝を深く胸にきざみ、人生のしるべ、よりどころとして、一日一日を大切に生きて行かなければならないと思うのであります。

今日のこの日の感激を忘れずに私達寮児一同これからの生活の中に、この四宝が、ますます、しっかりと根をおろして、社会のみんなが、明るく、正しく、仲よく、喜び働く、ゆたかな心の持ち主となるように、私達はより一層つとめますことが、御恩に報いる事でもあり、希望と進歩の日々であると

思います。

私達はこの四宝の碑を寮生活の支柱として、寮発展の為に努力しますことを誓ひまして除幕式のあいさつとします。

(中三、F・S子)

寮長先生の葬式に参列して

十月三十一日、三隅町湊浦の極楽寺で、寮長先生の葬式が行なわれました。

本堂に入ると寮長先生のおこつがおいでありました。私は寮長先生が去る三日寮の皆なといっしょに、お別れに來た時は、布団の中で、ねむっておられる様子だったのに、今度は小さな箱の中に入ってしまったわね、あんな姿になってしまわれるなんて、……と思いました。思い出すとあまりにもとっさの事でした。寮に毎日毎日通っておられる時、あんなに元気だったのに、急になくなられるなんて、信じられない気持ちです。寮長先生の奥様は悲しい事です、ね、私もわかります。だって私は、実の父をなくしたんですもの、そして又育ての父をなくしたんですもの、お父さんの式には出られませんでしたが、寮長先生の葬式に出られた事は、大変うれしい事です。

佛様はお父さんの命をうばい、又寮長先生の命をもうばってしまわれた。でもその命は佛様が自分のそばで、大切に守っていて下さるでしょう。

寮長先生は、記主良忠上人に天国であわれたでしょう。きっとはめられた事でしょう。

『お前は日本全国に広まる程自分の力を出しつくして、立派な行いをして来た、よくやった。』……とネ。

私も少しでもいいから、自分の力を出しつくして社会の為に働けたらいいと思いました。

寮長先生はもうこの世におられません、私達の心には、いつまでも、いつまでも、生きつづけて行く事と思います。

一人一人の心の中に……ノ

(小六、H・F子)

(八) 沿革概要

昭和二十八年十一月一日

開寮(定員三十名)

〳 三十三年三月二十五日

児童遊園地造成の為土地

五、〇〇〇坪購入。

〳 三十四年八月六日

地域児童と交流の為の第一回

「よい子の集い」を開く

〳 四十年三月二十五日

鉄筋コンクリート寮舎完成

(一〇九坪、八百五十万円)

〳 四十二年四月三日

定員四十五名認可

〳 四十六年十月二日

初代寮長、三上善海逝去

〳 四十六年十一月十一日

二代寮長 三上運海就任

〳 四十七年五月三十日

児童遊園地完成

〳 四十七年十一月五日

「四宝の碑」退所した子供達によって完成。

〳 五十四年四月十一日

遊園地に通じる、架橋完成する。「杉の森大橋」と名づくる。費用七、三〇〇万円。

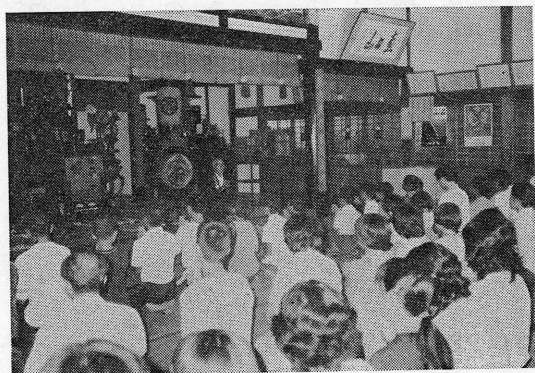
(九) おつとめ

(一) 月影の歌

。月影の いたらぬ里は だけれども
ながむる人の 心にぞすむ。

。み佛の教えまもりて すくすくと
生おい育つべき 子等に幸あれ。

(今上天皇賛歌)



(二) 香 偈

願わくは わが身浄きこと香炉の如く
願わくは わが心智恵の火の如くにして
念々に戒定の香をたき
三世十方の佛に供養したてまつる。

(三) 篤敬三宝

あつ みつのためら
。篤く三 宝を敬え

三宝とは さとれるもの（佛） ことわりのみち（法）
つどいのちからなり（僧） 則ちいのちあるもののたの
むところ。よろずくにのうやまいなり。

何の世いずれの人か この法をとうとばざるべき それ
みつのたからによらざれば 何を以ってか まがれるを
なおせん。

(四) 三帰依

。一心にさとれるものにきえしたてまつる さとれるもの
は ひととしひとの とうとさなり。まさにねがわくは
ひとびととともに さとりのみちをふみしめて ふるい
たつ心をおこさん。

。一心にことわりの道に きえしたてまつる。ことわりの
みちは おのれなきの とうとさなり。まさにねがわく
は ひとびととともに ふかくおしえのくらにいりて
ちえ うみのごとくならん。

。一心につどいのちからに きえしたてまつる。つどいの

ちからは いやさかえの とうときなり。まさにねがわ
くは ひとびととともに よのひとを すべてととのえ
て よろづさわりなきものとならん。

(四) 四弘誓願

。いのちあるものはかぎりなけれども
ちかつて みちびかんことを ねがう。

。わずらいやなやみは つくることなけれども ちかつて
たちきらんことをねがう。

。ことわりのかずは はかりなけれども ちかつて まな
ばんことをねがう。

。さとのみちは はるかなれども ちかつて
なしとげんことをねがう。

(六) 懺悔の偈

。われらさきにつくるところの もろもろのあしきわざは
みなわれらが さけがたきむさぼりと いかりと おろ
かさによるものなり われらが みと ことばと こ

ころよりおこるところ すべてわれらいまことごとく
さんげしたてまつる。

(七) 十念

(八) 聞法の偈

。人の身はうけがたし いますでにうけたり。み佛の法は
聞くことやすからず いますでに聞きたり。この身こ
のいのちあらんうちに さとらざるば いつの日にか
さとることを得ん。

(九) 開經の偈

。み佛のときたまえるのりは そのことわりはなはだふか
くして よろづのときをふるとも あいあうことがたし。
われいま みみに聞き 心にたもつことえたり ねがわ
くは み佛の しんじつぎを さとらんことをえん。

(十) 撰益文

。み佛様の みひかりは あまねくわれらの世界を照らし
念仏となえる人をみな すくいとらして すてませず。

(十一) 十念

(十二) 総回向文

。ねがわくは このくどくをもつて すべてにおなじくほ

どこして　ともにきよき心をもつて　やすきみ国にうまれなん。

(四) 三 礼

。なゝむ　あゝみ　だゝぶ

なゝむゝ　あゝみ　だゝぶ

なゝむゝ　あゝみ　だゝぶ

(四) 佛の子供の歌

。われらは　ほとけの子供なり

うれしいときも　かなしいときも

みおやのそでゝにゝすがりなん。

。われらは　佛の子供なり

おさなきときも　おいたるときも

みおやにかわらず　つかゝえなん。

(四) おさとし。

(四) わくしたちのねがい

(一) 底ぬけに　人を信ずる人間となろう

あの人にも　この人にも　太陽にも　空気にも　まもら

れている私達。

みんなを信じよう　どんな人にも美しいことば　あたた
かいことばで話しかけよう。佛様は底ぬけに私達を信じ
ていて下さる　佛様のねがいの中に　底ぬけに　人を信
じる人間となろう。

(二) よろこんで　あたえる人間となろう。

ものがあればものを　ちからがあればちからを　ちしき

があればちしきを　みんなに与えよう

花は美しさを　おします

小鳥は　たのしい歌をおしまない

だれにでも　あたえている

あたえる時　人はゆたかになり

おしむ時　いのちは　まずつくなる

よろこんで　あたえる人間となろう。

(三) いのちを　大切に作る人間となろう。

たったひとつの　とおといのち

ほとけさまは　いのちのあらわれ

草も木も　鳥も魚も　みんな

いのちをたいせつにして　いきている

きびしい自然のなかに いきぬくいのち

ちからづよいいのち ふしぎないのち

このいのちの とおとさを

ほとけさまが おしえてくださる

いのちをたいせつにする 人間となろう。

四 かんがえぶかい 人間となろう。

どんなときでも じぶんでよくきき

よくみて かんがえよう

ほとけさまは ちえのひかり

ふかいかんがえから うまれたしずけさ 私達は

しずかに おちついてかんがえ なにごとも さいごま

で やりとげよう ちしきだけでなく みについた

ちえをみがこう

かんがえぶかい人間となろう

五 しめいにいきる人間となろう。

みんなのしあわせのために

いきている人は うつくしい

じぶんのことだけしか かんがえない人は

ところがせまく さびしい

ほとけさまは すべての人が

しあわせになる道を さとられた

ひとのため 社会のためにいきる

それがわたしたちの とおといしめい

あたえられた ちからをもって

せいじつに ゆうきをもって

せい一ぱい はたらこう

しめいに いきる人間となろう。

六 規律ある しあわせをよろこぶ 人間となろう。

。しあわせは 正しい規律から うまれる

お金があっても 長いきしても

規律がなければ 不幸な人

からだも 心も けんこうで

きびきび動き 仕事にはげむ

そこに 強く 明るく 正しい生活の

リズムがある よろこびと感謝がある

規律ある しあわせを よろこぶ 人間となろう。

(1) (全国青少年教化協議会)

『ほとけさまのおしえ』より。

(四) 一同合掌 十念 終り。

(十) 結 び

去る四月十三日、本誌主幹 故恒川武敏先生が突然来訪せられ、三祖誕生地良忠寺に参拝され、そして聖唹寮を見学され、資料をお持ち帰りになりました。まもなく四月二十二日に急逝されたことを後日知り、おどろきと残念でいっぱいです。心より御冥福をお祈り申し上げます。

今回初めて原稿の依頼を受け、当施設の紹介の機会を得ました。

施設に住込、子供と共に二十年、日常の子供達の処遇におわれ、なにこそ研究的な発表の出来ないことが残念です。聖唹寮を創設された、故三上善海前寮長の原稿を整理し、運営の方針と施設の紹介をさせていただきました。

皆様方の御批判、御助言をお願い申し上げます。

めまぐるしく進展、変遷し、価値感が多様化して行く今日子供の教育をめぐる諸問題が、年々増加し、大きな社会の関心と呼んでいます。そういう現状の中で、家庭の有り方、学校教育の有り方が問われています。

当然養護施設に於いても、これらの子供の養護の有り方が問われています。

子供が育つということはどういうことか、一番基本的な事が欠けて来ているようです。又子供が育つ為には、どう有るべきか、どの様に対応して行くか、養護の現場にあっても常に、自らに問いつづけている課題であります。

『自分に報いられるというところの薄きを覚悟の上で絶大なる慈悲心と熱意と忍耐力を持つことが要請せられる。だから単に学校に於ける教育だけでは容易に得られない、実際の現場に入って種々な艱難や問題にぶつかりながら、自然に体得することが必要である。しかし、かかる慈悲心と熱意と忍耐力とは、その人が宗教的信仰を持っている場合において円成されることが多いものである。』

然るに宗教的信仰を持つ様に勧めることは学校に於いても施設にしても、公立の場合は、不可能といえないまでも、甚だ困難である。民間では、その点が容易である。

そこで福祉事業従事者は、民間福祉施設、とくに宗教的精神に基づく施設に入って鍛錬されることが望ましい……………幸福は主観的なものである、個人の心の問題である、心の問

題は法律や制度だけではどうにもならない。』

（元福岡女子大学々長 干瀉龍祥。中外日報）

「どうせ使われの身だ、与えられたことしかやるに及ばず」と言う受け身の氣持が定着すると、個人の成長は停滞どころか後退してしまふ、仕事を通じて、自らをみがき、そして育てられたことに感謝し、それに答えて立派な社会人になるうとする人間、そして生きていることに喜びを見い出す、そういう人間を育成して行く仕事が私達の使命と思う。

聖龍寮は昭和五十八年が来ると創立三十周年を迎え、その間巢立って行った子供達は、二〇〇近くになる。それぞれ家庭を持って、幸せに暮している子供達も多くいる。施設が島根の田舎にある為に、就職は京阪神方面が多い、事後指導に多くの時間と費用が必要だ、社会に出てもまだまだ一人歩きの出来ない子供も多い、一人歩き出来る様になるまで、みてやらなければならない。結婚して家庭を持つと、やっと一人育ったと言う実感がわいて来て暇がうるむ時もある、対人関係の仕事には際限がない。目標を失なわず、私達は、「なぜ」「なんの為に……」、この仕事をするのか、原点に帰りが

ら進みたい。

やがて正月が来ると多くの子供達が帰って来る、忙しい中にも、一番楽しい時でもある。